

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成 30年 10月 12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 霊長類研究所

職名・学年 研究員

氏名 坂巻 哲也

助成の種類	平成 30年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第27回国際霊長類学会大会 (27th International Primatological Society Congress)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Intergroup encounters in bonobos at Wamba and Kokolopori. (ワンバとココロポリにおけるボノボの集団間の出会い)		
開催場所	ケニア共和国 ナイロビ 国連事務局 (UNON)		
渡航期間	平成 30年 8月 19日 ~ 平成 30年 8月 25日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	282,228円	
	返納すべき助成金額	17,772円	
	助成金の使途内訳	大会参加登録費	56,510円
		渡航費	80,283円
		宿泊費	119,700円
交通費・ビザ代		25,735円	
	合計	282,228円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回、貴財団からの助成により、国際学会で有意義な発表、研究者との交流を行なうことが出来ました。心より感謝申し上げます。		

成果の概要

霊長類研究所 研究員 坂巻哲也

研究集会名：The 27th International Primatological Society Congress

(第 27 回 国際霊長類学会大会)

場所：ケニア共和国 ナイロビ 国連事務局

会期：2018 年 8 月 20 日～25 日

【国際学会大会の概要】

第 27 回国際霊長類学会大会が、ケニアの首都ナイロビで、2018 年 8 月 20 日から 25 日にかけて開催され、その大会に参加、研究成果発表を行なった。この学会は、霊長類を対象とする生態、保全、行動、認知、生理、遺伝など、さまざまな分野の研究者からなる。学術大会は二年に一度、野生霊長類が生息する国とそうでない国で交互に開催される。開催中は、世界中の研究者が一堂に会する貴重な場となる。今大会は 800 名を超える参加登録があり、世界各国の研究の成果発表やシンポジウム、講演などが行われた。

【発表の概要】

8月22日の午後に、マックスプランク研究所のサーベック博士とヴィティグ博士がオーガナイズするシンポジウム、「チンパンジー属の社会組織と協力—二種の比較

(Social organization and cooperation in the *Pan* species – a comparison)」が催された。このシンポジウムでは、野生のチンパンジーとボノボを研究する、若手研究者を含む13名による発表が行われた。チンパンジーでは、タイ、ゴンベ、マハレ、キバレ、ブドンゴの調査地から、ボノボでは、ワンバ、ロマコ、ルイコタル、ココロポリの調査地から、新しい研究成果が報告された。

私は、「ワンバとココロポリにおけるボノボの集団間の出会い (Intergroup encounters in bonobos (*Pan paniscus*) at Wamba and Kokolopori)」というタイトルで発表を行なった。霊長類の集団間交渉は、攻撃的なものから親和的なものまで多様であるが、概してどの種でも、集団間では敵対的な交渉が多く、親和的な交渉はまれである。その中で、ボノボは集団間の出会いにおいて、一部の個体が混ざり合い、交尾や毛づくろいが見られるなど、親和的な社会交渉が観察される。この点において、集団間関係がきわめて敵対的な姉妹種のチンパンジーとは対照的である。

1973 年にボノボ調査がはじまったワンバは、ボノボ調査地の中ではもっとも長期に

調査が継続しているサイトである。ワンバでは調査初期の 1970 年代、集団間の出会いは観察されたものの、多くはなかった。その後、1980 年代半ばに至って集団間の頻繁な出会いが観察された。この変化は、おそらく隣接集団の人づけが進んだことによるものと思われる。このことは、霊長類の集団間関係の研究においては、隣接する複数集団の人づけが重要であることを示している。

本発表ではおもに、ワンバの 2 集団とココロポリの 1 集団を対象に、それぞれが隣接集団と遭遇する頻度を提示した。それぞれ、10 年、7 年、2 年間のデータに基づく。ワンバではここ 10 年に渡って隣接集団の人づけを集中的に進めてきた。ココロポリでは 2007 年から人づけが行われ、サーベック博士の調査隊による集中調査が 2015 年にはじまっている。いずれの集団でも頻繁な集団間の出会いが起こっており、異なる集団のあいだで一時的に混ざり合うことが観察され、複数集団のつかず離れずの遊動が数日から一週間以上も見られることが分かった。最大で 4 集団が一か所に集まることも確認された。いずれの集団でもおよそ 7 月から 9 月に遭遇頻度が最大となる年周期の変動パターンが確認された。

ワンバのデータからは、食物の量が最大になる時期に集団間の遭遇頻度が高いことが分かった。このことは、食物競合が低くなることが、集団間の出会いと親和的な混ざり合いがよく起こることと関係していることを示唆している。また、食物が少ない時期に限って、性を腫脹させたメスの多いときの方が、出会いが頻繁に起こる傾向が確認された。ボノボの社会においては、競合の程度が低いときには、集団間の個体が親しく交渉をもつことで何かしらの利益が生じていると考えられる。

食物競合の程度は、食物の量だけでなく分布のパターンにも応じる。食物パッチが局所的に集中する場合には、他集団の個体を追いはらい防衛することで、食物パッチを占有することもできるだろう。今後はボノボとチンパンジーのそれぞれの調査地で、より具体的な食物競合とメイト競合の比較を行なうことで、集団間関係における種間の差異と種内の変異をもたらす基盤と条件を明らかにすることができるだろう。

【謝辞】

私はこれまで、日本人研究者による二つの調査地、マハレとワンバで研究を行ってきたのですが、今回のナイロビでの国際学会は、野生のボノボとチンパンジーを他のサイトで調査する研究者と交流を持つ貴重な機会となりました。今学術大会で得られた新しい研究成果と研究者との交流を通して、具体的な調査地間の比較研究の構想などを議論することができました。このような機会を与えてくださった京都大学教育研究振興財団に、心から感謝申し上げます。